

# タイ国北西部におけるカレン族の平地民化

飯 島 茂

## Plain Emulation of Hill Karens in Northwestern Thailand

by

Shigeru IIJIMA

### 1 はじめに

最近、低開発国の近代化の問題のなかで、“国民形成” (nation building)<sup>1)</sup>が中心課題としてとりあげられている。山地民などの少数民族の同化もそのなかで重要な地位をしめていることはいまさらいうまでもない。

そこで、本稿は山地民がどのような形で平地民化し、タイ人に同化してゆくかということに焦点をあてながら、タイ国北西部のメホンソーン県メサリアン地区のスコー・カレン族 (Skaw Karen) についてのべてみることにしよう。今後、特別にことわらないでカレン族といった場合には、スコー・カレン族をさすことにする。

すでに、既報<sup>2)</sup>では山地カレン族 (Pwa K'sa) の文化変容の研究をとおして、この問題の通時的 (diachronic) な一面を分析してみた。そこで、ここでは山地カレン族と平地カレン族 (Pwa Baylah) を共時的 (synchronic) に比較研究することによって、カレン族の平地民化の問題に接近してみたい。

“東南アジアは地理的にも、文化的にも、その多様性がきわだっている。北部の山岳地帯から南部の海岸地方までの亜熱帯的大陸性気候から熱帯的海洋性気候までの一連の地理的変化もさることながら、文化的多様性はさらにいっそう複雑な様相を呈している。たとえば、ビルマ、タイ、ラオス、カンボジアは小乗仏教、ヴェトナムは大乗仏教、マレーシアとインドネシアはイスラム教、それにフィリピンにおけるキリスト教をくわえると、この地域は「世界宗教」のすべてを包含していてたいへん壮観である。それに言語の地域的差異にいたっては枚挙にいとまがないほどである。

しかしながら、東南アジアの多様性を強調するだけでは、真実の一面しか物語っていない。

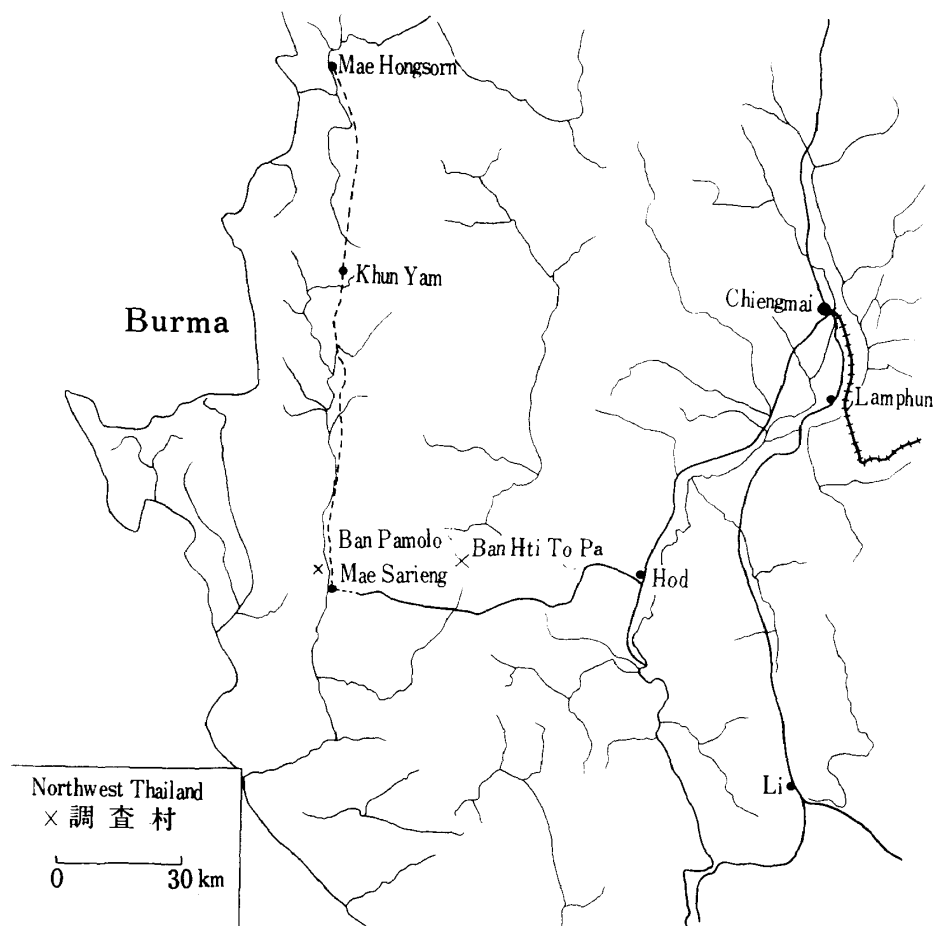
1) Deutch (1963)

2) 飯島 (1965), Iijima (1965)

すなわち、家族構造、女性の地位の高さ、精霊信仰、生産技術の性質などはおおくの共通点をもっている。<sup>3)</sup>

“このように共通の特徴がひろく分布していることは、東南アジアの多様性の底に統一性が横たわっているという印象をあたえている。ところが、逆説的にいうと、この地域の多様性こそが決定的な統一性をもたらしているのである。

東南アジアのいずれの国にも山地民と平地民がいて、それぞれの生活様式の差異——時には抗争——がわれわれのこの地域にたいする理解の整理をたすけるかぎになるのではなかろうか。東南アジアにおけるいかなる国家をとってみても、相対的に同質的で、多数の人口からなっている平地民がその中核をなしている。この種の平地民は単一で主要な言語をはなし、世界宗教のひとつに帰依していて、集約的な水田稲作に生活を依存している。ところが、いずれの国も山地民という少数民族を所有していて、かれらはきわめて異質的である。山地民は雑多な言語をはなし、かれら自身の政治的統一性はない。それに、近年にいたるまで、平野部とはは



3) Burling (1965) p. 2

そばそとした政治的紐帯以上のものはもっていなかった。山地民は通常焼畑農業をおこない、平地民にくらべると、仏教徒、ヒンドゥー教徒やイスラム教徒になる速度がたいへんに緩慢である。<sup>4)</sup>”

以上のような一般論が具体的にどのように機能しているか、山村の Hti To Pa と平地村の Pamolo について観察することにしよう。

## 2 エコロジー

いうまでもなく山地カレン族と平地カレン族でいちばんことなるものは、両者におけるエコロジカルな適応の差異ではなからうか。ここでは山地カレン族のおこなう焼畑による稲作と平地カレン族によってなされている水田稲作を比較することによって、両文化の前提になるエコロジカルな条件についてふれることにしよう。焼畑と水田による稲作をこのような意味でえらんだことは将来の本報告におけるモデル設定の伏線としてであって、正確な民族誌的記述ではないことを申しのべておく。すなわち、山地カレン族でも今日では多少の水田稲作はおこなっているし、平地カレン族も自分たちの領域の限界地においては若干の焼畑農業をおこなっている。ただ、本稿においてはこれらが山地カレン族や平地カレン族の文化形成に決定的な役割をはたしていないという意味でほとんどふれなかったのである。



写真1 平地カレン族の村 Pamolo



写真2 山地カレン族の村 Hti To Pa

4) Burling (1965) p. 4

## (1) 焼畑農業

焼畑農業は東南アジア諸国の原住民にとって重要な生業である。国々によってその名称がかわる。たとえば、フィリピンにおいては kainging, ビルマでは taungya, マレーでは ladang, タイでは tham rai とよばれている。<sup>5)</sup>

“これら熱帯諸国の典型的農業はその自然的条件によく適合している。熱帯において、火は耕作者のいちばんよい道具であり、多量に心要な労働力の節約になる。たぶん、火による耕地の整備は1日あたりにすると、すき（鋤）と肥料をつかった集約農業よりもおおい収益をあげるだろう。そのうえ、熱帯地方の住民はわるい衛生状態も手伝って、過重な労働には適していない。一方、焼畑農業は熱帯の土壌の状態にある種の適応をしめしている。それは森林により肥沃になった土地を利用し、同時に焼却した植生の灰が肥料として役だつ。それに、あまり土壌をほりかえさないので、浸蝕による害を抑制し、また焼畑の周囲にある森林に手をつけないので、畑地からの土壌流亡がすくない。”<sup>6)</sup>

メサリアン地方にすむカレン族の経済生活の基礎をなすものは、いうまでもなく米作である。米作は水田(chi)によるものと、焼畑(xu)によるものと2種類あるけれども、山地カレン族の経済をささえるものは後者の焼畑農業であろう。タイ国北部の山岳地帯ではこのほかにアカ族(Akha), ラフ族(Lahu), リス族(Lissu), ミャオ族(Meo), ヤオ族(Yao)などの山地民によって焼畑農業がおこなわれているけれども、ここでは山地にある Hti To Pa 村のカレン族の焼畑による稲作について、すこしたちいつてのべることにしよう。

カレン暦 La Plu (1月中旬～2月中旬)の末に村人は山にはいり、この年の焼畑の候補地を物色する。カレン族は二次林の再生のぐあいを見て、土壌の肥沃度がどれだけ回復したかをしらべるのである。カレン暦の ①a Le (2月中旬～3月中旬)と Te Peh (3月中旬～4月中旬)の約2カ月間にわたって、焼畑候補地にある雑木や下草の伐採をおこなう。おおきい木は下枝をおとし、中位の木は枝をほとんどとりさる。ちいさい木はきりたおされる。これらは乾期のため比較的短時間に乾燥する。カレン暦 Te Ku (4月中旬～5月中旬)には火をはなち、山焼きをする。この頃になると、タイ国北部の山岳地帯は山焼きの煙で空がかすむほどである。山焼きの目的は雑木や下草を焼却することにより、丘陵の斜面をたがやしよくすると同時に、その灰は肥料として役にたつだけでなく、雑草の種子や作物にたいする病虫害を一時的にせよ減少させるのに役だつのである。なお、1回の山焼きで不十分な場合には、焼け残りの木や根を集めて再焼却をする。

La Sa (5月中旬～6月中旬)にはいると、月初めに陸稲の播種がおこなわれる。

焼畑には掘り棒で30センチメートル間隔であさい穴があげられ、それぞれの穴には数つぶず

5) Pendleton (1962) p.157

6) Gourou (1963) p.31

つ稲の種子がまかれる。  
Hti To Pa 村の陸稲の種類には bumpō (黒色種), buki (赤色種), bumbō (黄色種) の3種類があるという。

Hti To Pa 村の慣習として, Sapga とよばれる村の宗教的指導者である長老の R は, 焼畑における陸稲の播種にさきだち, みずからそこでこの年の第1番目の穴を掘る。これは焼畑農業が山地カレン族にとって



写真3 焼畑をする Karen。口笛は風を呼び、野火は山野を焼きつくすという。(Mae Ko Ki 村)

は, 経済活動であるのみならず, 信仰生活の一部になっているほど文化の核にくいこんでいるからであろう。

焼畑における陸稲の播種では, カレン族としてはめずらしく共同作業がおこなわれる。1枚の畑を皆で播種しおえると, つぎの畑, またそのつぎの畑とうつりながら, 村中の畑の播種をおこなってゆく。

ちなみにつけくわえると, 水田稲作についてはこの村で協同作業が発達していないのは, 焼畑のように大昔からのながい伝統がなかったことと, それが数10年前にこの村に導入された頃には, ある程度の“個人主義”がすでにカレン族のあいだで発達しはじめていたからではないだろうか。

Dei Nya (6月中旬~7月中旬) になり, 稲が12~13センチメートルぐらいになると第1回目の除草がある。Lah Nwe (7月中旬~8月中旬) になり, 稲の草丈が豚の高さぐらいになると第2回目の草取りがおこなわれ, その後2回, 合計4回の除草がおこなわれる。この際には一般に女性による協同作業がおこなわれる。つぎの月 La Xo (8月中旬~9月中旬) になると, 出穂にそなえて, 畑の周囲に森林から伐採してきた雑木で垣根をつくったり, ふるい垣根を修復したりして, 畑を野獣の害からまもる。

稲の種類により, 出穂がおそい, はやいはあるけれども, La Ku (9月中旬~10月中旬) に陸稲の穂がではじめる。その頃になると, 稲の間作として栽培されていたトウモロコシやキュウリがみのり, それらの収穫がおこなわれる。Chi Mu (10月中旬~11月中旬) の末には陸稲の穂がではじめ, Chi Sah (11月中旬~12月中旬) に収穫がおこなわれる。Hti To Pa 村にすこし

ばかり栽培されている水稲は陸稲よりすこしおくれてみのり、したがってまた収穫も Chi Sah のおわりにおこなわれる。

1964年の例だと、10月20日すぎから Hti To Pa 村では収穫がおこなわれはじめ、11月8日ぐらいまでつづけられた。収穫にさきだち村人はそれぞれの畑にある出作り小屋にとまりこみ、野豚などの野獣を監視にゆく。

収穫がはじまると、一家の大部分が村から2～3キロメートルはなれた畑にある出作り小屋にとまりこんで、仕事をする。本村の家は手間のすくない家では、しめてゆくか、時には老人や子供が留守番をすることがある。

収穫については協同作業がおこなわれない。しかし、近隣の村からは親類縁者が手伝いにくるし、村内でもはやく収穫のおわった者が近親の者の刈り取りを手伝う。

また、その年に自分の家の米を消費してしまい、ほかの村人から米をかりた者は、収穫のような農繁期にその米代を労働で支払わなければならない。収穫期には石油カン1つの米にたいして2日間、草むしりの時には3日間はたらかなければならない。

## (2) 水田農業

東南アジアにおける主要な農産物である稲の一番重要な生産様式は、いうまでもなく水田稲作である。土地が平坦で、降水量が十分にある所か水利の便のよい場所では稲作が発達してきた。“ほかの農耕形態と同様に、水田農業の伝統的技術は気候と地形の地方的に特有な条件への長期にわたる苦難にみちた適応の結果である。これは焼畑農業よりもはるかに集約的な土地利用形態なので、それが発達したのは注目すべきことである。

田の面を水平にすること、あぜをつくること、それに必要におうじて水田のテラスをつくることによって土壌浸蝕のたえざる脅威にたいする効果的な保護と、さらには何千年とはいわなまでも、何百年間も土壌の肥沃度をうしなうことなしに、大部分の地方で耕作がつづけられてきた。これは灌漑水や大水がはこんでくる肥料分によって、水田土壌の肥沃度が保持されているからである。”<sup>7)</sup>

メサリアン地方の谷間にすんでいる平地カレン族の経済をささえるものは、ほかのタイ系平地民のそれと同様に水田農業である。この技術は山岳地帯からおりてきたカレン族が<sup>9)</sup>谷間の住民であるタイ・ユアン (Thai Yuan) 系の北タイ人 (Khon Muang) か<sup>10)</sup>ラワ族 (Lawa) からまなんだものである。

7) 1964年にはこの距離であったけれども、焼畑の位置は毎年移動するので、時には数キロメートルもはなれた所になることもある。

8) Fisher (1964) p. 75

9) Pamolo 村の場合には短期的な見方をすればこの記述があたる。しかし、長期的に見た場合にはタイ族が北方からこの地方に移動してくる以前にカレン族はラワ族と同様に、平地の住民であったのかもしれない。これについては、べつの機会にのべることにする。

10) Mon-Khmer 系の1族。

平地の Pamolo 村ではカレン暦の La Sa (5月中旬～6月中旬) から Dei Nya (6月中旬～7月中旬) にかけて、田のあらおこしがおこなわれる。Dei Nya の月には田に灌漑水が導入される。この月には苗床が田の一部につくられ、月の後半から、つぎの La Nwe (7月中旬～8月中旬) にかけて、その苗代に稲もみが播種される。

La Ku (9月中旬～10月中旬) には雨期のために河川が増水をし、田畑にも十分水がゆきわたるので、田植がおこなわれる。それについて、Chi Mu (10月中旬～11月中旬) と Chi Sa (11月中旬～12月中旬) には除草が2～3回にわたっておこなわれる。焼畑の場合とはことなり、1カ所に連作をしても灌漑水や天水が雑草の発生を抑制するので、除草にかかる手間は相対的にすくない。

Chi Sa のすえ、すなわち12月中旬にちかづく、ぼつぼつ水稻の収穫がはじめられるが、本格的になるのは Lah Naw (12月中旬～1月中旬) である。

このようにして、平地の Pamolo 村における1年間の農作業が終了するのである。

### (3) 経済生活

以上のべてきたように、山地カレン族と平地カレン族の生活圏の地理的条件の差異、したがってまたエコロジーのちがいによって、前者が他の山地民と同様にほとんど焼畑耕作に依存しているのにたいし、後者はタイ族と同様に水田耕作に従事し、平地民と類似した生産様式をとっている。

このような状況のもとにあって、山村の Hti To Pa と平地村の Pamolo のカレン族の経済がどのようにいとなまれているかここでのべることにしよう。

まず、Hti To Pa では村の付近一帯の土地は大昔から“村のもの”であって、村に membership をもつことと、村の土地をたがやすことはまったく同義語である。

全戸数24軒中22戸までが焼畑をもっている。すなわち、村全体で92パーセントの戸数が畑地を保有しているのである。その例外の2軒のうち、1軒は80～90才ぐらゐの老婆なので、近親者によってやしなわれている。いま1軒の家は戸主が労働者として村外にいつもはたらきにて



写真4 水稻の収穫。山地 Karen も数10年前に Thai 族から水田農業をまんだ。(Mae Ha Ki)

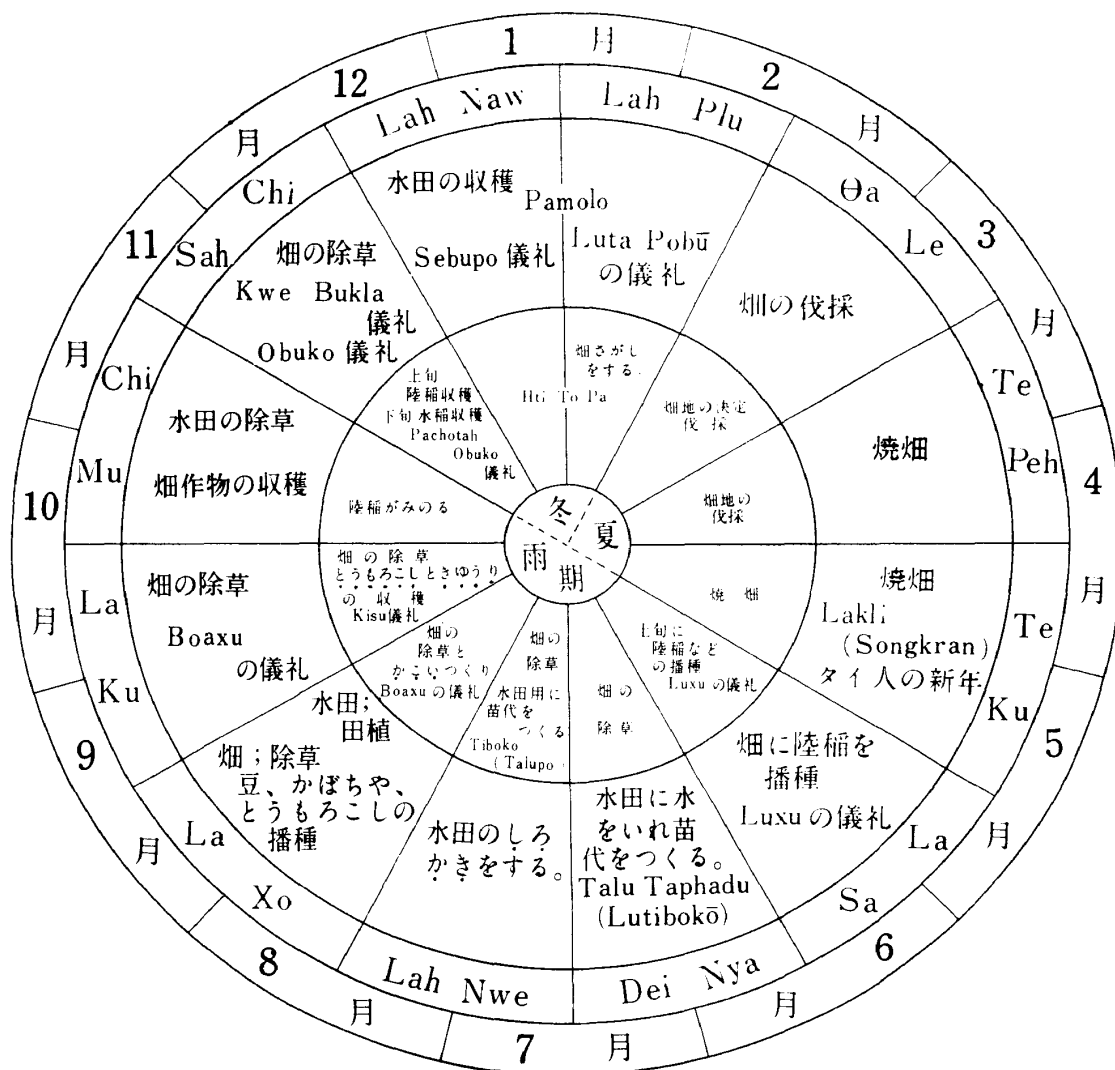


表1 カレン族の農業と儀礼

ているので、焼畑をする余裕がないのである。ちなみにつけくわえると、現在このあたりの山地カレン族がおこなっている焼畑農業は7団式農業である。各戸とも村の周囲に7カ所の焼畑候補地をもち、毎年そのなかで1カ所だけを焼畑として利用するのである。

村人のほとんどの者が焼畑をもっているのにたいして、水田は24戸中わずかに6戸しか所有していない。これは全戸数の25パーセントにしかあたらない。1戸あたり1raiから3raiまでの所有面積であるけれども、焼畑の場合と同様に、正確な測量がおこなわれたことがないので、実際の面積はわからない。

一方、Pamolo村では村が平地にあり、商品流通のただ中に位置している関係で、土地が商品として離合集散する。全戸数50戸中28パーセントにあたる14戸が自分の水田を所有しているだけである。このほか22パーセントにあたる11戸がメサリアンの地主から水田をかりて、耕作している。水田所有者は1～6raiの水田をもっていて、1戸あたり平均約3.3raiである。



畑については各戸とも家の周田か村のまわりに 1/4 ~ 4 rai ぐらいの土地をもっていて、バナナ、ココナツ、こしょう、ピーナツ、大豆、いんげん豆、さつまいも、砂糖きび、タバコ、野菜、マンゴー、パパイア、陸稲、カノン果樹などを栽培している。しかし、いずれにせよ、1戸あたりの所有面積の平均が 1.5 rai にすぎないので、商品作物を生産する余地はほとんどない。

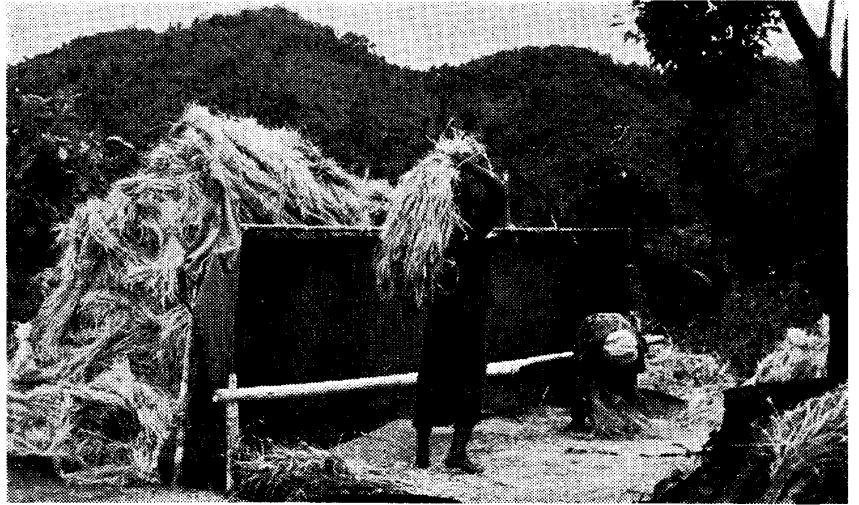


写真5 焼畑における稲の脱穀。この場所是一種の“聖域”で、働く者以外ははいることもできない。  
(Mae Ha Ki)

家畜や家きんについては、山村も平地村とも差異はなく、Hti To Pa 村でも Pamolo 村でも水牛、豚、鶏を飼育している。水牛は水田耕作には役牛として不可欠な家畜であると同時に、収入のすくないカレン族にとっては、かけがえのない現金収入源であるようだ。またこれについて、豚は収入源としても、また儀礼用としても重要な家畜である。水牛とはことなり、女子にでも飼育が可能のために、豚は“女性の”家畜といわれ、もっぱら一家の主婦か娘がその飼育にあっている。年頃になり、娘が豚の飼育に本腰をいれはじめると、村人はその娘に、いよいよ結婚適令期がきたとひやかすのがつねである。それは豚が結婚準備のためのたいせつな資金源にもなるし、鶏と同様に、結婚の儀礼にも必要だからである。

Hti To Pa 村では24戸中16戸が水牛をもっていて、1戸あたり最低1頭から10頭を保有していて、平均3.7頭の水牛を飼っていることになる。豚は13戸が飼育していて、1軒で1頭から6頭ぐらいもっている。鶏は大部分の家で多少とも飼っているけれども、ほとんどが野放し状態であるために、実数はつかみにくい。夜間には山猫やひょうなどの野獣から鶏をまもるために、家の高床の下につくった小屋らしきものに入れることで、わずかに家きんの面目をたもっている。

Pamolo 村では50戸中18戸が水牛を保持していて、1戸あたり1頭から6頭、平均3.2頭飼育している。豚は20戸が飼っていて、1軒あたり平均で2.2頭もっている。なお、鶏については、Hti To Pa と同様に、ほとんどの家で飼育しているけれども、数の増減がはげしいので、実数はつかみにくい。

以上、Hti To Pa と Pamolo 両村に共通している家畜や家きんについてのべてきた。しか

し、このほかに山村で飼育していて、平地村では飼育していない家畜が2種類ある。それはヤギと象である。もっともヤギはここでは経済性はほとんどもたず、Hti To Pa村では宗教指導者(Sapga)が悪霊(damuxa)よけのために飼育しているという。

一方、象はカレン族にとっては経済的に重要な動物であるとともに、一種の status symbol をしめす家畜なのである。カレン族が1頭1頭の象に名前をつけるほど愛着をしめしているさまは、ヒマラヤ山脈の高地にすむチベット人やシェルパ族のヤクにたいする態度を思わせるものがある。Hti To Pa村では14戸が象を所有していることになっている。しかし、村にいる象のどれ1頭をとってみても、ある特定の個人とか1軒の家で所有しているものではなく、村内、村外の縁者、親戚か友人と共有しているのである。すなわち、そのひとつの理由としては、象が人間よりも長寿であるために、遺産相続などによって、所有権が分割されてゆくと、他の理由としては、象が高価なために、何人かの者と共同購入して、労役につかうからであろう。しかし、タイ国北部全体としては、ティーク材の過伐のために、林業が斜陽産業であるために、象もかつてもっていた経済的意義をうしないつつあり、その傾向はトラックなどの発達により決定的に促進されているように思われる。

村外の賃労働にたいする山地カレン族と平地カレン族の態度の差異は興味ぶかい。山地カレン族といえども、現金の魅力は十分に知っているけれども、象による材木とか物品の輸送のほかは、村外にでて現金収入をもとめない。それは山地カレン族が平地民にたいして警戒的であり、あまり接触をしたがらないという理由のほかに、山村にたいする商品経済の侵入がまだそれほどではなくて、村落経済に自給自足性がつよいからではないだろうか。

しかしながら、一方平地カレン族は土地が十分になく、農業だけでは生活できないので、村外に出かせぎにゆく者がすくなくない。くわえて、Pamolo村の場合はメサリアンの町からわずか2キロメートルあまりのところにあるために、商品経済の村落経済にたいする影響はたいへんにつよいものがある。それゆえ、平地カレン族の生活には現金は不可欠なものになっている。Pamolo村50戸のうち、すくなくとも30戸からは1~3人ぐらいの者が村の内外で賃労働をしている。大部分はメスラータ川(Mae Orata)をこえて、メサリアンの町にはたらきにゆく。職種は雑多で、使いばしり、庭づくり、木こり、溝掘りなどで、1日5パーツから30パーツぐらいかせいでいる。

このほか山村ではあまり見られない経済活動は、Pamolo村からは毎朝のようにカレンの女が付近のタイ人の女のようにてんびん棒に野菜やバナナ、タバコなどをいれて、メサリアンの町にある市場まで、商売をしにゆく。しかし、商品の量がきわめてすくないために、村落経済を決定的にささえているものとは思われない。

### 3 信 仰

山地カレン族にいわせると、仏教化したり，キリスト教化したカレン族はほんとうのカレンではないという。このように，カレン族がカレン族としての資格を保持する第1の条件はアニミストであることのようにである。換言すると，カレン文化の本質はアニミズム，すなわち精霊信仰であるといえよう。

ここではその精霊信仰にかんする儀礼を中心として，山地カレン族と平地カレン族の社会を浮き彫りにするうえで不可欠のものだけに焦点をあてることにしよう。

#### (1) 農 耕 儀 礼

##### *Pahmeko* と *Luxu* の儀礼

*Hti To Pa* では焼畑に陸稻を播種する時に，御飯を木の株のうえにおいて，精霊をよび，祈りをあげる。昔は豚や鶏をいけにえにして儀礼としていたけれども，今日では御飯しかもちない。そのみではなく，村の古老ですら，この *Pahmeko* の儀礼をおこなう対象の精霊の名前さえもしらなかつた。

*Hti To Pa* で *Pahmeko* といわれる儀礼は，平地の *Pamolo* 村では *Luxu* という名前でおこなわれている。

*Luxu* の儀礼にさいしては，畑に竹で図1のような祭壇をつくる。これは元来北タイ人が地のぬし (*Chao Din*) に捧げた儀礼からまなんだもので，カレン族は図2のような祭壇を伝統的にはもちいていた。このあたりにも平地カレン族の平地民化の姿をかいま見ることができる。

播種がおわった時に，畑の所有者は村の *Sapga*<sup>11)</sup> を司祭にたのみ，*Luxu* の儀礼をとりおこ

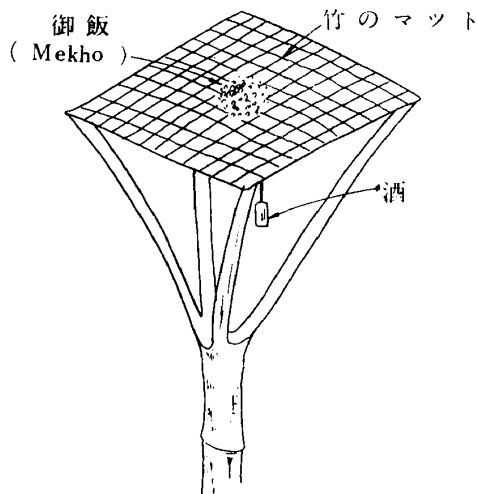


図1 北タイ文化の影響をうけた *Luxu* の祭壇

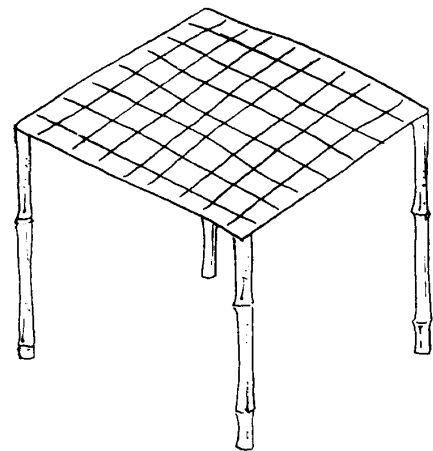


図2 カレン族古来の *Luxu* の祭壇

11) 前述のように，村の宗教的，精神的指導者で，山地カレン族は *Hiko* ともいう。

なう。鶏2羽と酒1本が通常用意される。2羽の鶏はさっそくいけにえに供され、血は祭壇の柱にぬる。酒は図1でもしめされているように、祭壇にささげられる。鶏は料理され、つめ、肉、内臓は御飯といっしょに祭壇にささげられる。さらに、肉と内臓の一部は木の切り株のうえにのせて、精霊に祈りをあげる。

以上のように、平地カレン族の場合には Luxu の儀礼がかなり保存されている。しかし、若者にこの儀礼がなんという精霊にささげられているかと質問すると、まったく精霊の名前をしらず、なかにはタイ人が精霊一般にもちいる呼称 Pi といいた者がいたのが印象的であった。このあたりにも、平地カレンの文化変容の方向が暗示されている。

### Talu Taphadu の儀礼

別名を Taluphadu とも Lutibo Ro ともいう。Lah Nwe になると、水田にほぼ水がゆきわたり、その一部に苗代がつくられる。この頃に Pamolo 村のような平地カレン族の村では Hti K'sa Ko K'sa (水地のぬし<sup>12)</sup>) という精霊にたいして、Talu Taphadu の儀礼がおこなわれる。まず、Hti K'sa (水のぬし) のすんでいる灌漑水の取りいれ口に7段のはしごのついた祭壇をつくり、儀礼をおこなう。通常はその灌漑溝の所有者2~3名がそれぞれ持参した2~3羽の鶏をいけにえにする。血は祭壇の柱にぬり、羽毛は火でもやし、肉や内臓の一部は祭壇にささげる。また、3年に1度は豚をいけにえにして盛大な儀礼がおこなわれるという。家畜をいけにえにする場合には、Sapga が屠殺者を決定する。

晩になると、村の男性は年令をとわずローソク<sup>13)</sup>をもって、村の西方にある山のふもとにゆく。そこには Ko K'sa (地のぬし<sup>14)</sup>) がすんでいて、儀礼用の小屋がある。

そこではもし豚がいけにえとして Ko K'sa にささげられる場合には、豚の頭をたたいて殺す。肉は料理し、内臓やひづめとともに祭壇に



写真6 山村の Sapga。かれはこのあたりにかつて存在した long house の最後の目撃者である。(Mae Ha Ki)

12) これを山地カレン族などでは Ti K'cha Ko K'cha と発音する。

13) 昔使っていたみつろうのかわり。

14) 別名 Padu K'sa という。

ささげられ、Sapga は祈りをあげる。その後、Talu Taphadu の出席者は既婚者と未婚者にわかれて、Sapga のイニシアティブのもとに酒盛り、ついで食事がおこなわれる。この儀礼のために、各戸からおすとめすの鶏ひとつがいもちよられ、出席者には鶏料理が平等に分配される。最後に Sapga が Hti K'sa Ko K'sa に祈りをささげ、この儀礼をおわる。

### Talupo の儀礼

別名を Tiboko ともいい、山村の Hti To Pa でおこなわれる儀礼である。これはおそらく平地の Pamolo 村でおこなわれている Talu Taphadu の退化したものではないかと思われる。

La Xo の月に灌漑溝でおこなわれる。昔は2段になった手のこんだ祭壇をつかって儀礼をおこなっていたけれども、今日では6本の柱のうえに1段の簡単な祭壇をつくるだけである。祭壇につける階段もしいだいに単純化されてきた。昔は5段もしくは7段のものをつけていたけれども、現在では3段の階段を使用している。

今日では鶏だけがいけにえに供され、祭壇にその血をぬり、羽毛をはりつけているけれども、昔はそれと同時に豚もいけにえにされて、肉とともにひづめも祭壇にささげられた。祭壇にはそのほか御飯もそなえられる。この儀礼は畑でおこなわれる Boaxu の儀礼と同様な宗教的意義があるとかんがえられる。

### Boaxu の儀礼

この儀礼は山地カレン族も平地カレン族も陸稲の栽培についておこなっているもので、平地にある Pamolo 村のように水田稲作を中心とする農業をいとなむ所では比較的なおざりにされている。しかし、山村の Hti To Pa のように焼畑による陸稲の栽培をしている所では、かなりはっきりとした形態で残存している。

山村では Boaxu の儀礼はつぎの5つの部分にわかれている。

#### (A) Kakē の儀礼

小型の籠をつくり、米、とうがらし、ベテルナツ、米ぬか、稲の葉などをいれて、陸稲の“敵”に“たべて”もらい、それに畑からたちさってもらう。

#### (B) Tatamo の儀礼

鶏をいけにえにして、その血を稲の葉にそそぎながら祈禱をする。

#### (C) Chexu の儀礼

へび、なき鹿、猿、鳥などの諸動物にやどる精霊のわざわいから畑ではたらいっている村人をまもるためにおこなう。図3のようなものに米と米ぬかをまぜていれて、そのうえから鶏の血をそそぐ。

#### (D) Lumē の儀礼

この儀礼は焼畑とたいへんに関係のふかいものである。祭壇 (dapo)

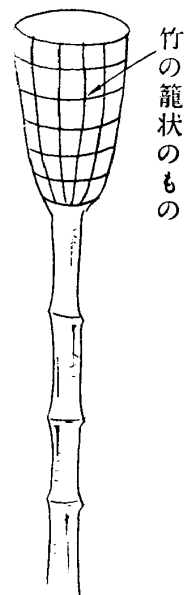


図3  
Chexu の祭壇

にもえさしの薪か炭をささげ、火の精霊 Mikasa に焼畑の成功を祈る。

(E) Pechoxu の儀礼

焼畑につくる出作り小屋にちいさな祭壇をつくり、そこで鶏をいけにえにする。それを料理して、とうがらし、塩、酒、稲の葉とともに Hti K'sa Ko K'sa にささげ、農作業に従事している者と畑の安全をいのる。

Obuko と Sebupo の儀礼

この2種類の農耕儀礼は、稲作の収穫儀礼である。一般には Obuko の儀礼を収穫のまえにおこない、Sebupo の儀礼を収穫のあとにおこなう。しかし、山村の Hti To Pa では2つの儀礼をいっしょにして、収穫儀礼として収穫のまえにおこない、Obuko とよんでいる。

儀礼にさきだち、畑の所有者から陸稲の初穂をとってきて、それをたく。川からは魚やカニをとってきて料理をして、御飯とともに、いろりにある三徳がわりの3個の石のうえにのせて、精霊にささげる。この儀礼にさいしては山地カレン族のもっともたいせつな家財道具である食台 (sabi), とうがらしをつく石の乳鉢、米をいれる籠に草の葉をむすびつける。食台は前日に使用したものをあらわずに儀礼にもちいるのは興味ぶかいことである。

平地のカレン村 Pamolo では、本来の Obuko のほかに Sebupo の儀礼がおこなわれている。そのため脱穀をする場所にちいさな祭壇をつくる。そこに精霊 Pibiyo をまねき、鶏のいき血を祭壇にささげて収穫を感謝する。また、Pibiyo は田のなかのカニ穴にすんでいるといわれているので、その土をひとつかみとってきて穀倉におく。所によっては土のかわりに鶏の羽毛をつかうところがあるという。儀礼に使用した鶏は料理して、家人がたべる。

Kwe Bu Kula の儀礼

水田にかんする農耕儀礼で、おもに Pamolo のような平地の村でおこなわれている。脱穀するまえに籠のなかに1羽の鶏をいれて、水田をあるきまわる。その後、鶏をいけにえにして、図4のように脱穀場につるす。稲穂をたたく所には御飯をそなえる。また、カレン族の儀礼の



写真7 平地 Karen の水田における収穫儀礼。(Mae Ko Ki)

例にもれず酒もそなえ、Bu K'sa (稲のぬし) に祈りをあげる。このような儀礼をおこなうと、脱穀のさいに収穫量が増加すると信じられている。

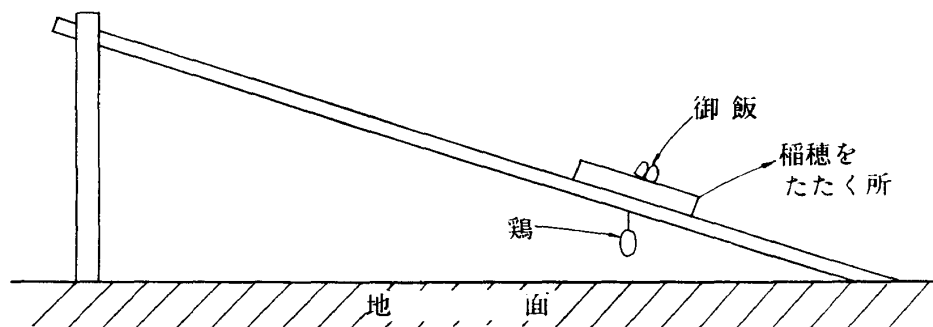


図 4

### Lutā Pobū の儀礼

水稲の収穫や脱穀のような農耕儀礼がすべて終了すると、Pamolo 村ではこの儀礼がおこなわれる。田の所有者が司祭して、バナナ、ジャグリーの果実、タバコ、酒、御飯、カレー汁などを Hti K'sa Ko K'sa にささげて感謝をする。これは一種の収穫祭なので、村人がこぞって参加しておこなわれるといわれる。

#### (2) その他の儀礼

農耕儀礼のほかいくつかの儀礼が存在しているけれども、そのなかでもっとも重要と思われる Kisu と Oxe の儀礼にふれよう。

### <sup>15)</sup>Kisu の儀礼

この儀礼はこのあたりのカレン族のあいだでしばしばおこなわれるたいせつなもので、山村でも平地村でも観察することができる。

まず、山村の Hti To Pa における Kisu の儀礼の様相から記述することにしよう。司祭役の Sapga が儀礼をする家の入口で、高床にかかっているはしごを食事のしゃもじにつかっている竹の棒でたたきながら、口のなかでぶつぶつと祈りをあげる。そのさいに Sapga のわきにはかご (komā) がおかれる。そのなかには酒が1本、既婚者用の婦人のカレン服の上衣とスカート、布、ちまきのような白いもち、ごまいりのもち、鶏2羽、茶わんなどがいれてある。Sapga は竹のしゃもじで鶏の頭をたたきながらまた祈禱をおこなう。その直後に2羽の鶏は家人によってひねり殺される。それをすぐに水あらいをして、室内にもちかえる。いろいろばたで鶏の頭から足まで火にかざし、それから羽毛がむしりとられる。この鶏は料理され、カレーとして食事に供される。

その晩にはこの儀礼の一環として、Kwesi がおこなわれる。Sapga は湯のみ茶わんから酒を1滴ずつ指をつかいてゆかにたらし、祈りをあげる。そのさいには家人一同は Sapga の方向をむいて、仏教式の合掌をおこなう。しかし、Kwesi に参加している他の村人たちは大声で

15) 山村では所によって Kichū と発音する。

談笑し、この儀礼にはまったくといってよいほど、おごそかな雰囲気がない。祈禱がおわると、Sapga がまず酒のみ、つづいて家人をふくめた村人たちがまわしのみをする。やがて、utā という謡曲のような合唱がはてしなくつづき、また時には思いだしたように祈りがあげられる。

この儀礼のさいに家族の者の手首に木綿の糸がまきつけられる。これが本来の Kisu の意味である。

Kisu の期間中には村では物品の売買はもちろんのこと、品物の移動すらも禁じられる。

この儀礼は農耕儀礼のように定期的におこなわれる性質のものではないようである。必要に応じて Kisu がおこなわれる。筆者が Hti To Pa 村に滞在中に Kisu の儀礼がおこなわれた時も、村の子供が死んだために、村人は不吉 (tachu) だからといって、それから9日目にふたたびおなじ儀礼をおこなった。

一方、Pamolo 村ではほとんど同様な Kisu の儀礼がおこなわれているけれども、山村とくらべると、Kwesi が多少複雑なやり方でおこなわれている。

Pamolo 村では Kisu の司祭は Sapga である Kwesi Ko と村長 (Ke) の Kwesi Da の2人によっておこなわれる。村長は副 Sapga の資格で Kwesi Da をするのであろう。

儀礼は Kwesi Ko の Kwesi により開始される。Hti To Pa 村の場合と同様に、Sapga は茶わんにいれた酒を祈禱をしながら指で1滴ずつ床にはじきおとす。その後、Sapga は御飯用のしゃもじで食台をたたきながら祈りをあげる。それと同様に参加者の最年長の女がしゃもじで食台をたたき祈禱をする。

食台の上には鶏肉のカレー、ちまきのような白いもち (metō), ごまいりもち (metopi) などがおいてあり、食台のまわりには数個の中型の皿に御飯がもりあげてある。食台と皿のあいだには何本かの木綿の白糸がおかれ、それは手首にまきつける Kisu にもちいられる。Sapga や家の老人はその糸をとりあげると、そこにでている食物や酒にひとまわりふれさせてから、家人の手首にまきつける。

この儀礼をしている部屋は家の寝室にあたるが、Sapga はその柱の所にゆき、ふたたび床に酒をたらしながら、Kwesi をおこなう。そのさいに家人は合掌をおこない、Sapga といっしょに祈禱をおこなう。それから酒は家族の者にまわされ、同席している他の村人にもふるまわれる。一同に酒がひとまわりすると、Sapga もその酒盛りに参加することができる。そのあたりから utā という哀調をおびた合唱がはじまるのも Hti To Pa とおなじである。やがて、Sapga のイニシアティブのもとに食事が開始される。

酒のびんに最後に残った酒はすこしずつへらして、ちょうどつかっている茶わんの1つにいっぱいになるようにする。これはカレンが縁起をかつぐせいかな、一同おおさわぎをしておこな

16) 山村と同様 sabī とよんでいるが、アルマイト製の大型の盆である。



う。その茶わん最後のいっぱい酒は、家族のなかの長老の男子が *Kwesi* をおこなう。その時にも家族一同が合掌して、祈禱に参加することはいうまでもない。このようにして、儀礼は終了する。儀礼の終了にあたり、*Kwesi Da* が祈りをあげる。

儀礼をおこなう3日間は手首にまいた糸をきってはならないし、村内における品物の売買、移動は禁止されている。

山村でも平地でも、*Kisu* の儀礼は *Hti K'sa Ko K'sa* (水地のぬし)、*Kachakacha Kalukacha* (山の精霊)、*Dakacha Lokacha* (家の精霊) にささげられたものであるという。しかし、平地の *Pamolo* 村では、*Kisu* は仏陀にささげられるものであると“誤解”している者もいる。これは平地カレン族が平地民化しているあらわれともいえるが、同時にカレン族がタイ人と“おなじ”であるということを書者のような外部の者に誇示する“故意の誤解”かもしれない。

### *Oxe* の儀礼

この儀礼は *Hti To Pa* のような山村でも、また *Pamolo* のような平地村でもおこなわれているもので、家の精霊 *Muxapadu* と悪霊 *Damuxa* にささげられたものである。*Oxe* はこのようにスコー・カレン族だけではなく、ポー・カレン族 (*P'wo Karen*) などでもおこなわれているところを見ると、カレン文化にかなりふかく根ざしている儀礼といえよう。両カレン方言で *Oxe* とよばれているけれども、スコー・カレン語で時には *Obwa* ということもある。

*Oxe* の儀礼の司祭役 *Xeko* はポー・カレン族の場合だと、男性でも女性でもそれをつとめることができるけれども、スコー・カレン族の場合には女性しか *Xeko* の役をするわけにはゆかない。いずれの場合も、一家の主婦が *Xeko* になることが儀礼をおこなううえでもっとものぞましいのである。しかし、この時に必要な資格としては、主婦が“罪”をおかしていないということである。もしそうだと、精霊のいかりにふれて、一家が翌年に食糧不足にみまわれる心配があるからだと思われている。

ポー・カレン族では主婦が病気などで *Xeko* として司祭役ができない時には、主婦の父方の祖父 (*pu*) がその役を代行することができる。しかし、まえにものべたように男が *Oxe* の司祭をすると、儀礼があまり有効ではないといわれている。

スコー・カレン族の場合には、*Xeko* には主婦の代役として長女 (*pomu*) が第1候補であるけれども、もし結婚などで家をはなれている時には次女、それ以下の娘も不可能ならば、まご娘 (*limu*) が *Xeko* の役割をはたす。また、まんいち家族のなかにこのような女性がいない時には、別の方法で儀礼をすることをかんがえなければならない。

ここで興味ぶかいことは、*Oxe* の儀礼では女性が *Xeko* としてたいせつな役割をはたすだけでなく、儀礼の単位がいわゆる1軒ごとにおこなわれていないということである。図5のように、母系を中心に儀礼集団が形成され、これをスコー・カレン語では *taduxo* とよんでいる。この集団の編成原理は現在までのところ十分にわからないけれども、すくなくとも *James*

Hamilton がポー・カレン族の研究により、カレン族に matrilineage があるとした記述は、この taduxo にかんするかぎり適用できないことだけはたしかなようである。

Oxe の儀礼では豚がいけにえに供される。その方法はスコー・カレン族の場合だと、さし殺すけれども、ポー・カレン族の場合には豚の口から水を注入して、これを溺死させる。

豚がいけにえにされると、Xeko が祈禱をする。豚はその後火にかけて、あぶられる。スコー・カレン族はそのままに豚から内臓をとりだし心臓や肝臓をしらべて、つぎの年の運・不運をうらなう。

豚の肉と内臓は料理して儀礼の参加者がたべるけれども、頭部は豚の体からきりはなして、鶏や酒とともに籠のなかに入れて森林に持参し、カレン族のいちばんおそれている damuxa にそれをささげるといふ。

ポー・カレン族の場合には、豚を殺した直後に、豚に刃物をさして、血をだす。その血を手につけて祈りをあげると、参加者は“罪”からすくわれるという。その後は豚の体に棒をさして、内臓をいれたまま火であぶるといわれている。

豚の肉と内臓はスコー・カレン族もポー・カレン族も身内の者だけではなく、他の村人にも分配する。

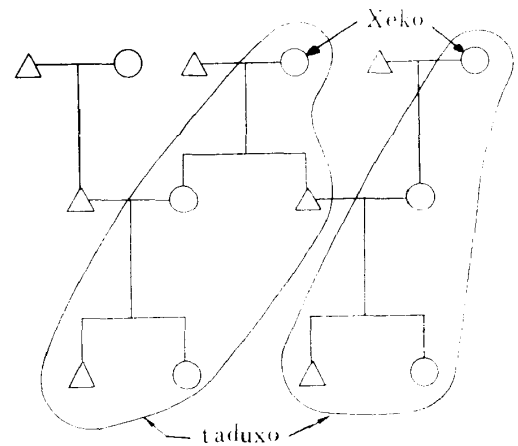


図5 Oxe の儀礼集団

#### 4 社会組織

##### (1) 家族と親族

“特殊化した政治的、経済的諸制度が未発達な社会においては、他の社会ではもっと精緻化した機構が独占している統治、生産、交換などの機能のかなりの部分を親族集団が担当している。”<sup>17)</sup> それ故、ここで家族を中心とする親族集団にふれることにより、カレン社会を多少浮きぼりにすることができるであろう。

##### (A) 家族

カレン族は Hti To Pa のような山村においても、Pamolo のような平地村においても、居住形態、社会、宗教、経済などにかんする基本的な単位はいうまでもなく家族である。カレン族の家族は理想的には母居的単婚家族 (matrilocal nuclear family) で、構成員は男とその妻、未婚の子供たちからなっている。この単婚家族は1軒の家屋を所有している。たいてい、結婚

17) Burling (1963) p.71

の時に親から分離して、1戸をかまえることが  
 おおい。カレン族は結婚後の居住形態として一  
 般に母居性をこのむので、村内もしくは村外か  
 からの男子が女の家へ婿入りし、おおくの場合に  
 は妻方の両親のとなり、もしくはそこに土地が  
 十分でない時には村内のほかの所に家をたて  
 る。

山村の Hti To Pa では全体の25戸のうち、  
 単婚家族が18戸で72パーセントにあたる。の  
 こりの30パーセント弱のうち全体戸数の20パ  
 ーセントにあたる5戸がいわゆる最少拡張家族  
 (minimal extended family) である。この最  
 少拡張家族の大部分ももともと単婚家族であっ  
 たところに、女のがわの両親のいずれかが死亡  
 して、それにくわわり、生計をともにするよう  
 になったのではないかとかんがえられる。

谷間にある Pamolo 村では全戸数50戸のうち  
 44戸が単婚家族であり、じつに88パーセントに  
 あたる。最少拡張家族をのぞくと、“本来の”



写真8 豚のえさをつくる少女。家畜の世話は女の仕事である。(Pamolo)

表2 Hti To Pa と Pamolo の家族形態

家族形態	Hti To Pa 村		Pamolo 村	
	戸	%	戸	%
Nuclear Family	18	72	44	88
Extended Family				
(A) Minimal Extended Family				
*Nf + Wi Mo	4	16		
Nf + Wi Fa	1	4	1	2
(B) Extended Family				
Nf + Wi Mo Fa			2	4
Nf + Wi Mo + Wi Br			1	2
Nf + Wi Fa + Wi Br	1	4		
Nf + Da + Da Hu	1	4		
Nf + Wi Br			1	2
Nf + Wi Si Hu Br Wi Mo			1	2
計	25	100	50	100

\*) NF は nuclear family の略語。

表3 Hti To Pa と Pamolo の家族構成

家族の人数	家族構成	
	Hti To Pa 村	Pamolo 村
1名	2戸	2戸
2	2	8
3	3	6
4	4	10
5	5	13
6	4	4
7	2	5
8	2	1
9		1
10	1	
計	25	50

拡張家族 (extended family) はわずかに全戸数の10パーセントにすぎない。

いずれにせよ、カレン族の家族のあり方は山村においても平地村においても、基本的な差異はないようにおもわれる。Hti To Pa と Pamolo 両村の家族形態の詳細は前頁の表2のごとくである。

家族構成の面からみると、前頁の表3のとおりである。

山村の Hti To Pa では1戸あたり平均4.8人、平地村の Pamolo では4.3人が家族の構成員である。

## (B) 結 婚

結婚後の居住形態については前述のごとく、母居性がカレン族の家族のあり方の“理想”になっている。山村の Hti To Pa もその例にもれず、20組の夫婦のうち70パーセントにあたる14人の夫が村外からこの村に婿として婚入している。妻が村外からこの村に婚入しているのはわずかに10パーセント、2例にすぎない。それも2人ともわずかに2キロメートルぐらいしかはなれていない Mae Ho Ki 村出身である。

一方、平地村の Pamolo では村内の全夫婦44組のうち、組合せの不明な6組の夫婦をのぞくと、全体の47.3パーセントにあたる21組の夫婦の場合、夫が村外からこの村に婚入したのである。妻が村外から Pamolo に婚入したのはわずか全体の11パーセントにしかあたらない5例にすぎない。しかも、その5名の女性のうち、3名が北タイ人である。このように3組の例は“特別な”ケースであり、したがって、ここのカレン族にとっては、父居的婚姻 (patrilocal marriage) はむしろ例外であるといえよう。この意味では山地カレン族も平地カレン族も基本的にはおなじ婚姻形態をとっているといえよう。

ところが、通婚圏については、山村と平地村とはきわめて対照的である。Hti To Pa 村の場合は村を中心に半径10~15キロメートル以内の数カ村が通婚圏の中心になっているのにすぎないけれど、Pamolo になると通婚している村はじつに24カ村にわたり、通婚圏は半径数10キロメートルにおよんでいる。

このような通婚圏の広さ、狭さの問題は山地カレン族と平地カレン族との平地民化の差異をしめすのであろうし、その背後には山地と平地の交通の便、したがってまた社会的流動性のちがいが影響しているのであろう。また、それとはふかい関係をもつことであるが、山村と平地村のコミュニティーとしての性質の相違もかかわりあいをもっているとおもわれる。この村落の性質についてはコミュニティーのところでのべることにしよう。

以上、山地カレン族と平地カレン族の家族についてのべてきたので、ここではそれを総括して、カレン族の家族についてまとめてみることにする。

カレン族の家族にかんする基本的特徴はだいたいつぎの3点に要約することができるだろう。

(1) 単婚家族か最少拡張家族が大部分である。

Hti To Pa 村 (20組の夫婦)

(A) 妻がこの村出身の場合、村外からきた夫の出身地

Fuedio	4 (名)	Po Pa Kī	1
Mae Ho Kī	3	Pachī	1
Maelai	2	Mae Uranoi	1
Hoe Paya	1	Hanu Mai	1
		計	14名 (70%)

(B) 夫がこの村出身の場合、村外からきた妻の出身地

Mae Ho Kī 2名 (10%)

(C) 夫も妻もこの村出身 4組 (20%)

Pamolo 村 (44組の夫婦)

(A) 妻がこの村出身の場合、村外からきた夫の出身地

Ban Pon	2 (1名は北タイ人)	Upo Kī	1
Umen	2	Mae Toklo	1
Muang Pai	1	Mae Lanū	1
Mae Sapu	1	Mae Poklo	1
Mae Pu Kī	1	Hsaw Hteet	1
Mae Cham	1	Mae Sarieng の南方	1
Mae Pang	1	Mae Sarieng の北方	1
Wan Kam	1 (北タイ人)	タイ国中部	1 (中部タイ人)
Mae Et Kī	1	ビルマ	1 (タイ系ビルマ人)
Ban Pē	1 (ラワ族)	計	21名 (47.3%)

(B) 夫がこの村出身の場合、村外からきた妻の出身地

Tah Kam	1 (北タイ人)	Mae Pang	1
Kapa	1 (北タイ人)	山村	1
Tonglem	1 (北タイ人)	計	5名 (11.4%)

(C) 夫も妻もこの村出身 11組 (25%)

(D) 夫も妻も村外出身

夫が Tepo Klā 出身 }  
妻が Mae Et Kī 出身 } 1組 (2.3%)

(E) 組合せ不明の夫婦 6組 (13.6%)

表4 通婚の形態

(2) 各家族ともおおくの場合には独立した経済単位である。それらは山村では焼畑により、平地村では水田により稲作農業をいとなむ。各家族は田畑のような不動産のほか、若干の水牛、豚、ときには山村で象などの動産を所有している。

(3) 家族は儀礼の単位であり、伝統的にはいくつかの農耕儀礼や Oxe のような家の儀礼をおこなう。

前述のようにカレン族の典型的な家族は、両親と未婚の子供たちの2世代をふくむ単婚家族か、おおくの場合、妻方の両親のどちらかが死亡した時にその片親が同居して形成する最少拡張家族である。婚姻後の居住形態については、母居的であることがおおいけれども、それは絶対的な法則ではなく、のぞましい居住形態であるというにすぎない。家によって娘がいない場合には男の子が嫁をもらうこともある。いずれの場合でも、子供のうちいちばんわかい者が家にのこり、家をつぐことがおおい。

このようなカレン族の家族は Freeman<sup>18)</sup> の定義によれば、永続的共同合体 (perennial corporation aggregate) であり、出生、養子縁組、結婚、死亡などによって成員の変化があったとしても、不動産、動産などの財産を共有し、世代から世代へとそれをつたえてゆく社会組織である。

カレン族の個人はある特定の家族の成員として生まれ、同時にひとつ以上の家族に属することはできない。個人は自分の属する家族にだけ、だいたい均分相続的原理にもとづいて、財産権を主張することができる。生まれた家の財産にたいしては、養子にゆくか、死亡するか、結婚するかにより、その権利を喪失する。

### (C) 親 族

カレン族の親族組織にはあたかも母系的要素が存在しているようにのべている人類学者がいるけれども、筆者の調査したかぎりでは家族のところでのべたように、一応双系的といってほぼまちがいはないであろう。前述の James Hamilton のポー・カレン族の研究によると、カレン族に matrilineage が機能をもっているような印象をうけるが賛成できない。

相続にかんして Hti To Pa 村の調査をおこなったところ、あきらかに双系的であった。婚姻後の居住形態に母居的傾向がつよいのにくわえて、末子相続的傾向があるために、不動産の相続は娘、とりわけ末娘がもらう場合がすくなくない。しかし、これが絶対的な法則ではない。息子も結婚後村内にとどまる時には親から田畑の一部を相続することができる。ちなみにつけくわえると、結婚後の居住形態はまえにものべたように、母居性がこのまれるけれども、そのほかに夫方か妻方のどちらのがわに、より多く土地があるかということが居住形態を決定するのに重要な要因になるようだ。

水牛や豚などはだいたい子供に平等に分配されるようだ。ところが象は高価なために頭数に

18) Freeman (1960) p. 67

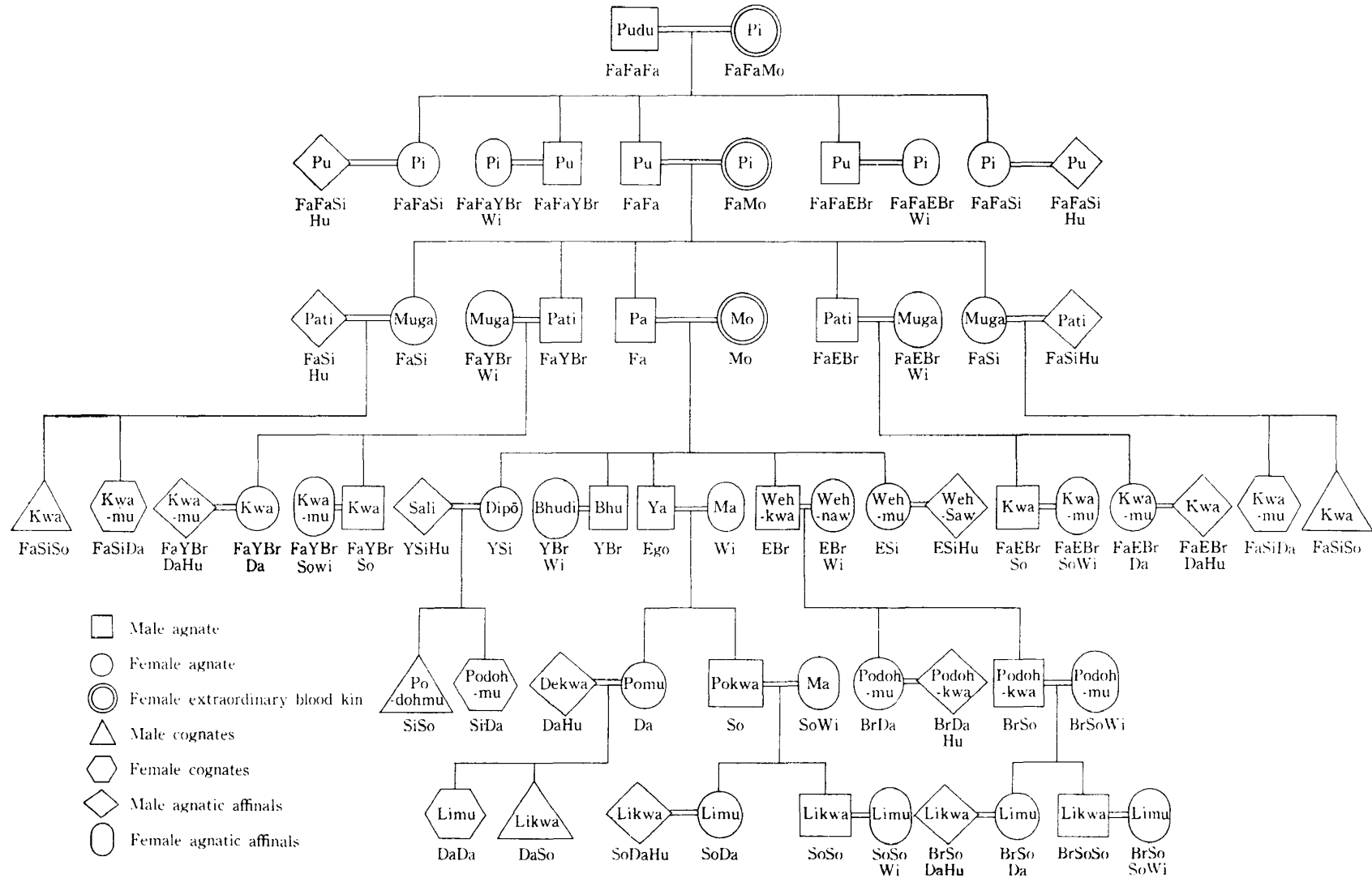


表5 カレン族親族用語

制限があるので、用役権のみが均分に相続される。子供のうちのだれかが象の飼育を担当し、時に応じてほかの者がそれを必要なだけ使用するといわれている。このようなわけで、大部分の象は兄弟をはじめとする近親者数名、ときには10名以上の者によって、“共有”されている。

親族呼称については表4にみるように、Egoの兄弟と姉妹とそれぞれの配偶者についてはちがった呼称を使用しているけれども、そのほかはまったく左右対照型な親族呼称をもっていて、双系的傾向をしめしている。年齢別による親族呼称は厳格にわかれている、カレン社会のあり方が示唆されている。このほかテクノニミー (teknonymy) が存在している。たとえば、一家の主婦は ma とよばれるほかに、nu+長女の名前+mu とよばれることがある。

いずれにせよ、カレン族の社会組織はタイ族にまさるともおとらない“ゆるく組織された (loosely structured)”ものなので、親族の機能などまことに把握しにくい。そのため、前回の調査ではまことに不十分な資料しかあつめられなかった<sup>19)</sup>ので、今回の調査でさらに解明したいとおもう。

## (2) コミュニティー

Mae Sarieng 地方はこれまでに何回か政治的な変化をこうむってきたが、そのようなたかいレベルの政治的变化は村落レベルの社会組織にはあまり影響をあたえなかったようにおもわれる。村落のようなコミュニティーは単婚家族と同様に本質的に普遍性をもった社会集団であり、<sup>20)</sup>また文化全体をささえるもっとも典型的な社会集団である<sup>21)</sup>とかがえられている。

そこで、ここでは山地カレン族と平地カレン族の文化の差異を知るうえで不可欠である両コミュニティーの性格の相違についてふれることにしよう。

Hti To Pa と Pamolo 両村のコミュニティーをくらべて、いちばん顕著な差異は前者のような山村が血縁村としての性格がつよいのにたいして、後者のような平地村が地縁村としての性格がつよいことである。もちろん、それは Hti To Pa 村のコミュニティー編成の原理に地縁性がまったく存在しないということではなく、また Pamolo 村のそれに血縁の原理がほとんど作用しないということではない。ただどちらかの原理がコミュニティーの基本的編成原理になっているということである。

すでに拙稿<sup>22)</sup>でものべたように、このあたりの山岳地帯には前世紀のおわり頃まではカレン族の long house が存在していたといわれている。Hti To Pa 村でもいまから70~80年以前に long house があつたことがたしかめられている。村の最古老といわれる R (約80才)<sup>23)</sup>によれば、

19) following-up survey として、1965年11月から1966年6月まで、前回とおなじ所でカレン族の調査に従事している。

20) Murdock (1960) p. 76

21) Ibid, p. 82

22) 飯島 (1965) p. 8, Iijima (1965) p. 420

23) このあたりのカレン族は12支をもちいないので、正確な年齢はわからない。この80才は自称であるけれど、ほぼまちがいないと思われる。



“自分が10才ぐらいのときに、long house の集會場で皆と食事をしたことをおぼえている。その頃は Taluphadu の儀礼もおこなわれていた。しかし、自分はちいさかったので、当時のことは夢のようにおもいだされるだけである……” という。このような訳で、すでに今日ではこのあたりの山地カレン族の long house の社会組織について詳細は知るすべもないけれども、Hti To Pa 村における現在の血縁組織ならびにその系譜を中心に、Marshall がえがいたビルマの Pegu 地区におけるカレン族の long house から類推すると、それは西ボルネオのイバン族 (Iban) の long house に類似したコミュニティーのようにおもわれる。すなわち、“それぞれの long house をつらぬく原理はひとつのコミュニティーを形成しているということである。換言すると、村落と long house はおなじものなのである。”<sup>24)</sup>

Hti To Pa 村のこの long house は焼畑農業を前提とするカレン族の nomadism が停滞するとともに解体にむかい、ついに今日にみられるような単婚家族もしくは最少拡張家族の集合体である自然村に変化してきたことはすでに前掲の拙稿でのべたとおりである。しかしながら、いずれにせよ Hti To Pa 村は“共通の祖先”をもつ血縁集団とそれに婚姻関係のある者からなっている典型的な血縁村であることはまちがいない。

このような Hti To Pa 村のコミュニティーの社会組織のあり方は土地制度ともふかい関係をもっている。すなわち、この村では村民としての membership と土地の所有形態とは表裏一体をなしている。村落の成員以外の者はこの村の領域で土地を所有することはいっさい認められないのである。ごく最近まで村の土地はすべて村の総有制のもとにあり、個々の家族はある一定の土地の一時的な占有権をもっていたのにすぎなかった。とにかく、現在でも Hti To Pa 村において土地を所有もしくは占有するには、2方法しか存在していない。それはこの村にうまれるか、またはこの村の成員と婚姻関係にはいるかのいずれかである。

これにたいして、谷間の平地村である Pamolo ではコミュニティーが Hti To Pa とたいへんことなつた原理で編成されていることはまえにものべたとおりである。Hti To Pa 村の山地カレン族のように血縁を中心にコミュニティーが形成されているばかりではなく、他村からのたんなる移住とか、流出などもみることができる。くわえて、この村に婚入した者のなかには、北タイ人、中部タイ人、ラワ族などの非カレン系住民もいるし、かつては村人がクメール (Khmer) と総称しているカンボジア人やカム族 (Khmu) も Pamolo 村の一員として生活をしていたといわれている。<sup>25)</sup> このように他の民族集団がカレン族のなかに吸収されてゆくのは、山村においてははなはだまれなことである。平地カレン族のこの種の吸収作用はたんに婚姻関係をとおしてだけではない。たとえば、筆者も Pamolo 村に調査のために滞在中何回か“カレンになる”ことをつよくすすめられた。村人のひとりにその方法をたずねると、“村で

24) Freeman (1960) p. 69

25) これらのカンボジア人やカム族はこの地方のチーク産業の労働者としてはたらいっていたのである。

おこなう Talu Taphadu に毎年連続で参加し、豚などをそのたびにいけにえに提供すれば、カレン族の一員になることができる”という。いずれにせよ平地村では筆者のような外国人でさえカレン族になる道がひらかれているということは、平地カレン族の文化をかんがえるうえで興味ぶかい。すなわち、いかなる者も村に何年か滞在することによって獲得される地縁性をとおして、カレン族の成員になることができるのである。

それではこのような平地村の異質的要素を吸収する“開放性”と、山村の血縁集団を基礎とする“閉鎖性”はどのような背景のもとに発達してきたのであろうか。

筆者はこれをエコロジカルな適応の差異によるとかんがえる。すなわち、Hti To Pa 村のような山村一帯ではカレン族が他の民族集団にくらべて“多数派”なので、いかなる状況のもとにあってもカレン族が他の民族集団に吸収されてしまう危険はない。したがって、“排他的に”血の“純潔”をたもつことによって民族集団の団結が確保される。それにたいして、Pamolo 村のように平地にあり、カレン族が他の民族集団にかこまれて生活している場合には、カレン族は“少数派”として、たえずタイ系もしくはラワ系住民などに吸収されるおそれがある。このような状態のもとにあっては、カレン族は“血の純潔”を犠牲にしても、文化集団としてのカレン族社会を保持しようとしているのではないだろうか。

以上のような社会的、文化的条件のもとにあっては、前述の Talu Taphadu (もしくは Talu-phadu) の儀礼も山村と平地村においては根本的に社会的な意義がことなっているようにおもわれる。

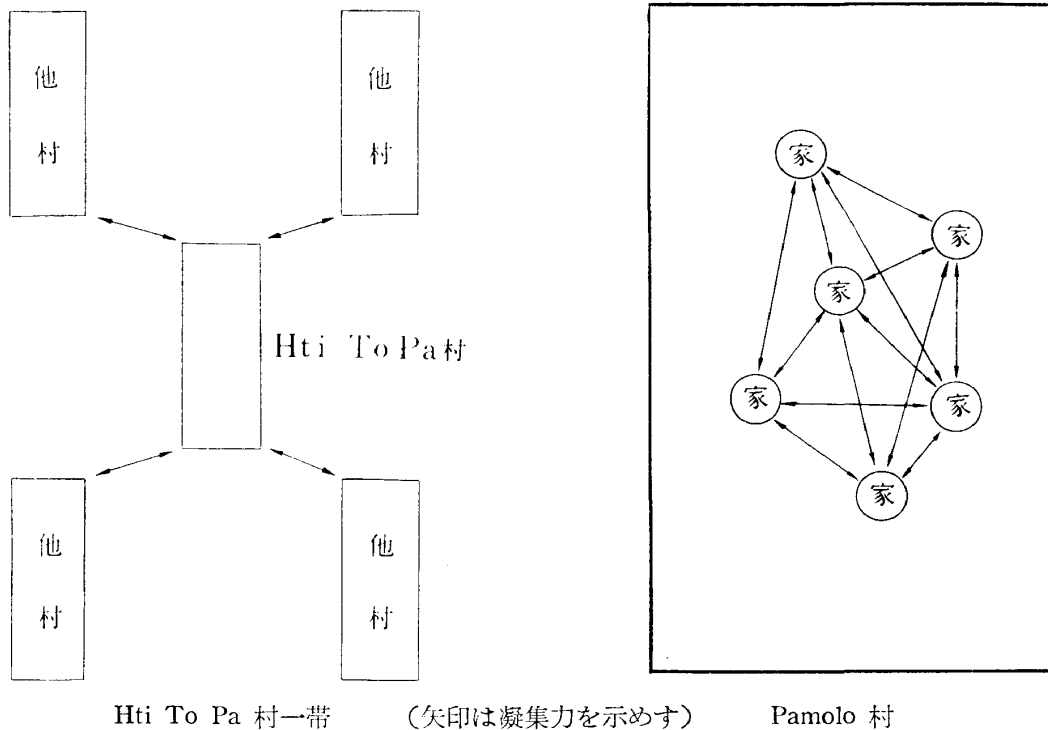


図6 Talu-phadu 儀礼の機能

Hti To Pa 村にかつて存在していた Taluphadu の儀礼は、Hti To Pa を中心として成立していた一種の部落連合間の超地縁的秩序 (supralocal solidarity) を維持するのが主要な社会的機能であったように思われる。しかるに、Pamolo 村においては、血縁組織による凝集力のあまりつよくない地縁村の内部の“団結”をかためる役割をはたしていることは十分に想像することができる。

図6の模式図は Hti To Pa 村と Pamolo 村における Talu Taphadu の儀礼の社会的意義の差異をしめしたものであるが、これは山村と平地村のコミュニティーの性格の相違を端的にあらわしている。

## 5 外界との接触

本稿の“はじめに”のところでものべたように、山地カレン族が平地民の文化の影響を受け、文化変容をはじめている様子は拙稿の「タイ国北部における山地カレン族の文化変容」でふれているので、ここではできるだけ重複をさけることにしよう。

まず、山地カレン族と平地カレン族との関係であるが、今日では交通の発達、山地への市場経済の浸透などにより、両者のあいだにある程度の交流はおこなわれているけれども、伝統的には通婚などをふくむ文化的交流はあまりおこなわれていなかったようである。

ちなみに、山地カレン族が平地カレン族やタイ系の平地民を自分たちと比較してどのようにかんがえているか、ごくおおづかみにのべてみることにしよう。

- (1) 山地カレン族は大声で話をし、あるきかたもはやく、動作はすこしあらっぽい。
- (2) 山地カレン族は食事を手でたべながら、あまり口をきかない。しかし、平地の人は食事にスプーンをつかい、よくしゃべりながらたべる。
- (3) 山地カレン族の娘は未知の人とはあまり長話しをしないけれども、平地民の娘はだれとでも平気で長話しをする。したがって、山地カレン族はかれらを“道徳的”とはおもわない。
- (4) 山地カレン族は自分の食物がなくても、客には食事をださなければならぬけれども、平地の連中はかならずしもそうはしない。このような山地カレン族の義理がたさがかれらの貧困の原因のひとつだという人もある。
- (5) 平地カレン族はタイ人と同様に、人から物をもらってもありがとうとはいわない。それに、山地カレン族ほどお礼のことをかんがえない。
- (6) 平地民は“独自性”があるけれども、山地カレン族は相互依存的である。
- (7) 山地カレン族は元来うるち米を常食にしているけれども、平地に移住すると、やがて北タイ人のようにもち米をたべるようになる。
- (8) 平地に移ったカレン族はまわりの平地民とおなじようにばくちをするようになる。
- (9) 平地カレン族は警察の目がひかっているために、儀礼用の酒を自分でつくり、買った酒

でそれをおこなう。しかし、それは伝統的精霊信仰をそこなうものである。

以上のように、山地民と平地カレン族や平地民のあいだには自然的、文化的なエコロジカルな適応などの差異により、かなりの文化的壁が存在している。

山地カレン族の平地民化は、前述の拙稿でもふれたように、たいへんに緩慢な速度でおこなわれている。その理由として、第1にあげられるのは、山地民の焼畑農業の生産力がきわめてひくく、余剰がすくないために、平地を支配している市場経済との接触があまり緊密でないからではなからうか。第2の理由は、山地カレン族も平地民の中核であるタイ系住民も双系的で“ゆるく組織された”社会をもっているために、接触がおこなわれた場合でも、文化変容が急激におこらないのではないかとおもわれる。この点ヒマラヤ山系でおこっているチベット・ビルマ語系住民とヒンドゥー・カースト社会との接触のような“強固に組織された”社会同志の接触にともなう“劇的な”文化変容とはかなりおもむきをこととしている。<sup>26)</sup>

一方、平地カレン族は北タイ文化のまっただなかで生活しているので、山地カレン族にくらべると、平地民化が多少すすんでいる。

平地におけるカレン族の平地民化は Pamolo 村の住民の宗教生活のなかに端的にあらわれている。村人によると、数10年昔からこの村のカレン族の仏教化が開始されたといわれている。その契機となったのは当時 Pamolo 村をおとずれた隠者のようである。村のカレンはその隠者をカレン族の精霊信仰のなかでもっとも中心的な精霊 Hti K'sa Ko K'sa の出現ではないかとおもって丁重にむかえた。隠者は村の家々に仏壇の原型である祭壇 (po da)<sup>27)</sup>をつくらせて、毎日ご飯、花、水などを捧げることを命じた。はじめの頃は現在の Hti To Pa 村におけるように、祭壇には礼拝対象物はなかったといわれている。しかし、今日では高僧の写真や時には仏陀の写真があり、これを村人が礼拝している。これは平地民化のひとつの過程である仏教化が進行していることを示唆しているのであろう。その間に、この村のカレン族は北方のメホンソン地方からシャン仏教の影響をつよくうけ、現在では Pamolo 村のうら山に仏塔 (chedi) がつくられているほどである。また仏教の祭の時には、村人はメスラータ川をはさんで対岸にある仏教寺院 (wat) にゆき、北タイ系の住民とともに宗教儀礼に参加する。しかし、おおくの場合にはカレン族はその宗教儀礼の意義をしらないだけでなく、その名称すらも時にはおぼえていないのである。

いずれにせよ、Pamolo 村のカレン族は平地にすんでいて、北タイ系の住民と接触がひんばんであるために、山地カレン族とくらべると仏教文化の影響をかなりつよくうけているけれども、それはカレン文化に構造的な変化をあたえていないのは、Hti To Pa 村の場合と基本的におなじである。すなわち、平地カレン族の“仏教”の本質はあくまでもカレン族特有のアニミ

26) Iijima (1963) p.48—50

27) カレン語で“花の置場”という意味。

ズムであって、仏教と重層信仰をしているのである。シャン仏教はこのカレン文化に多少外形的な変化をあたえただけにすぎないといっても過言ではないであろう。たとえば、今日でも信仰対象の中心は精霊であって、そのうえ、仏教行事の場合でも時には祈禱がカレン語でおこなわれている。

ところが、近年になって山地、平地のカレン文化をかんがえるうえで、たいへんに重要な変化があらわれたしている。それは精霊信仰の一部が決定的に崩壊する方向にむかったことである。すなわち、Oxeの儀礼が村人の一部で中止されはじめた。Oxe 儀礼はすでに信仰のところでものべたように、“ゆるく組織された”カレン社会の唯一の社会的核である家族の社会的紐帯をつなぎとめる機能をもっている。したがって、その衰退のきざしは平地民化の一環とかがえてもよいであろう。

Oxe 儀礼の衰退について、まず Hti To Pa 村についてのべてみよう。この村で Oxe の儀礼をする場合には儀礼集団を構成する家族員がいかなるところに移住していても、全員を家にあつめなければならない。また、この儀礼のしかたがわるいと、かえって悪影響がある。このように Oxe の儀礼は山地カレン族にとってはなほだやっかいな儀礼であるようだ。そのため、カレン族にとってはたいへんに重要な儀礼であるにもかかわらず、かれらはそれをおこなうのを内心めんどろにかんじていたにちがいない。ところが10年ほどまえにシャン系の平地民がやってきて、Chakasi という簡単な儀礼により、Oxe の儀礼を中止する方法をこの山地カレン族におしえた。Hti To Pa 村で Chakasi により、Oxe の儀礼を中止することにふみきった第1号はおどろくなかれ、Sapga<sup>28)</sup> のR老人である。この1例だけを見てもカレン族が Oxe の儀礼をどれだけうとましくおもっているか理解できる。ある日、R老人は筆者に“Oxe をやめてほんとうにほっとしている”と述懐していたのが印象的であった。<sup>29)</sup>

一方、平地村のPamolo村においても、Oxeは衰退の方向にむかっている。この村のChakasiの儀礼のやり方は、稲、とうもろこし、きゅうりなどの種子をもって、村外の森林にゆき、木のしたでそれがこげるほど火であぶる。この儀礼にさいしては鶏をいけにえにして、穀物や酒も用意する。司祭はシャン族の者がおこない、祈禱にはシャン語がもちいられる。このChakasiの儀礼のときには、Kisuと同様に出席者の腕にひもをまきつける。これにつかった酒はその後薬用にもちいられる。いずれにせよ、山村の場合も平地村の場合も、Chakasi の儀礼により、カレン族はOxeの儀礼のわずらわしさから解放される。このような現象は一応精霊信仰からの一種の離脱の口火としてかんがえられるのではなかろうか。

以上のようなカレン族の“自然”にまかせた平地民化はじつに緩慢な速度で進行しているのである。ところが Pamolo 村では平地民化に拍車をかけたのは、いまから6年まえに導入され

28) 信仰のところでものべたように、村の司祭役をする精神的指導者。

29) 飯島(1965) p.13

た初等教育である。それはこのみじかい年月のうちに急速な変化をもたらし、同時に深刻な影響をカレン社会にあたえたのであった。

Pamolo 村につくられた学校は4年制の小学校である。学校が僻地にあるために、設備はまだ十分とはいえず、校舎は村の西はずれにある木の葉ぶきの小屋である。教室は2つあって、12名の男生徒と10名の女生徒が上級と下級にわかれて、2人の先生から教えをうけている。先生のうち校長格の人は対岸の仏教寺院のちかくにすんでいるキリスト教徒のスコー・カレンである。わかひ方の先生はトンスー・カレン (Taungthu-Karen) と北タイ人の混血であるという。このように両先生ともカレン族の血をひいているために、Pamolo 村のカレン族にもたいへん同情と理解があり、熱心な教育がおこなわれている。

この学校の唯一の財産は大型のポータブル・ラジオであり、これはオーストラリアの援助によりおくられたものである。それにより、僻地の人間にバンコクやチェンマイからの放送をきかせて、標準タイ語の普及をはかり、“国民形成”の足がかりのひとつとする目的があったのであろう。ところが筆者が1964年の末に Pamolo 村の調査を開始した時には、アンテナがないのでバンコクからの放送をきくことができなかつた。<sup>30)</sup>

このような末端におこりがちな非能率さはあるにしても、学校教育にともなう文化変容にはたいへんにめざましいものがある。学校で教育をうけた子供たちは、この村があるメサリアン地方で一般にもちいられている北タイ語をとびこえて、標準タイ語を日常にももちいだしているのが印象的である。

学校教育にともなう急激な文化変容は子供たちに多少の混乱をあたえている。すなわち、筆者が村の子供に品物をあたえた場合、時には“*tablu khrab*”というような奇妙な礼の言葉を使うことがある。*tablu* はカレン語で感謝をしめす用語であり、*khrab* はいうまでもなく典型的な標準タイ語で、相手に敬意をしめす用語である。おそらく、Pamolo 村の子供は先生から目上の者や外部の人には、*khrab* のようなていねいな言葉をつかうようにいわれているのであろう。しかし、まだ標準タイ語になれきっていないカレン族の子供には、このような言語上の混乱が発生するのである。

このような正規の学校教育にともなう変化以外にも、Pamolo 村に学校ができ、したがってまた先生のような“インテリ”が村にやってくるようになったことは、“タイ化”の促進条件になっている。たとえば創氏改名にもおおきな影響をあたえている。カレン族は元来タイ族と同様に、自分個人の名前しかもたず、氏名をもっていなかった。ところがタイ人の場合には法令により、数10年以前から氏名をもつようになった。もちろん、その実際的な普及は容易なことではなく、今日でも農村などでは隣人の氏名をしらず、もっぱら個人名を日常つかっている

30) その後、筆者がチェンマイでアンテナをもとめて、このラジオにとりつけたので、現在は利用されている。

場合がおおい。タイ人でもこのような状態であるので、カレン族においては近年にいたるまで、ほとんど氏名が普及していなかったことは当然であろう。

個人名にかんしては、Pamolo 村が平地にあるという立地条件の関係で、以前から北タイ文化との接触がひんぱんであったために北タイ化がかなりすすんでいた。青壮年以下の村人はカレン名のほかに北タイ系の名前をもっている場合がすくなくない。

しかしながら、この村に小学校ができると校長先生の指導のもとに、創氏改名が本格的におこなわれた。現在では村の大部分の家でタイ系の氏名をもち、子供たちはカレン名と同時にタイ名をもっているのみか、時にはタイ系の名前だけをもっている。このように、Pamolo では北タイ化をとびこえた跳躍的文化変容が観察される。

このように、ゆるやかに進行してきた山地民の平地民化は学校教育の導入により、一部では着実に促進されだしたようであり、国民形成のなかで注目すべき流れとなることが期待されている。

この調査と本稿作成にあたり、内外のいろいろな人々にお世話になった。なかでも、つぎの方々にはひとかたならぬ御援助や御指導をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

タイ国側

General Netr Khemayodhin, National Research Council

Dr. Prasert Nanagara, //

Dr. Udhis Nakaswadi, //

Mrs. Soontaree Suvipakit, //

Mr. Aram Sutapintu, Dept. of Public Welfare, Ministry of Interior

Mr. Sayom Rattavichit, //

Mr. Prasit Dhitsavath, //

Mr. Vichit Phiyarom, //

Mr. Chart Kalayamitra, //

Mr. Niradorn Chaiyanam, Governor of Chiangmai

Mr. Suvan Kreuddham, Governor of Mae Hongson

Mr. Krit Suwonsomboon, then Nai Amphur of Mae Sarieng

Mr. Pa Sorn, Nai Palat Amphur of Mae Sarieng

Mr. Sutat Sousomchit, Kamnan

Mr. Tongkham Song Saeng

Dr. Boonchom Ariwongse

Mr. Supamit Ariwongse

Mr. Yongyouth Radchasantikul

Late Mr. Chamrats Sivichai

Dr. Tooi Chumsai, Chiangmai University

日本側

在タイ国日本大使館

粕谷孝夫 大使  
谷口守正 書記官  
堤功一 書記官  
野瀬芳宏 副理事官

京都大学東南アジア研究センター関係

奥田東 総長（前センター所長）  
小林章 農学部長（センター管理委員長）  
岩村忍 所長  
猪木正道 教授  
相良惟一 教授  
本岡武 教授  
石井米雄 助教授

### 参 考 文 献

- Burling, Robbins : *Rengsanggri*, Philadelphia, 1963. 377 p.  
Burling, Robbins : *Hill Farms and Paddi Field*, New Jersey, 1965. viii+180 p.  
Deutch, Karl W. et al. (ed.) : *Nation Building*, New York, 1963. xiii+167 p.  
Freeman, J. D. : "The Iban of Western Borneo," Murdock, George P. (ed.) : *Social Structure in Southeast Asia*, Chicago, 1964. pp. 65—87.  
Fisher, Charles A. : *Southeast Asia*, London, 1967. xix+831 p.  
Gourou, Pierre : *The Tropical World*, London & Colchester, 1960. xi+159 p.  
Iijima, Shigeru : "Hinduization of a Himalayan Tribe in Nepal," *Kroeber Anthropological Society Paper No. 29*, Berkeley, Fall 1963. pp. 43—52.  
飯島茂 : 「タイ国北部における山地カレン族の文化変容」『東南アジア研究』II—4, 1965. pp. 2—19.  
Iijima, Shigeru : "Cultural Change among the Hill Karens in Northern Thailand," *Asian Survey*, Berkeley, 1965. V—8, pp. 417—423.  
Murdock, George P. : *Social Structure*, New York, 1960. xvii+387 p.  
Pendleton, R. L. et al. : *Thailand*, New York, 1962. xv+321 p.